

# 二人の教祖

## ～出口なお

## ・出口王仁三郎～

おにさぶろう

神に生きまた恋に生き花に生き

希望に生きて百年生きむ

(出口王仁三郎)



ともしびのきゆるよのなかいまなるぞ

さしそえいたすたねぞこいしき

(出口なお)

大本には、二人の教祖がいます。  
一人は大本の開祖である出口なおであり、もう一人は、開祖を輔け、大本の教えを世界中に広めるために力を尽くした、聖師・出口王仁三郎です。  
今回は、大本の二人の教祖を紹介します。



みろく博士



『巨人 出口王仁三郎』  
(出口京太郎著・天声社刊・997円税込)

もっと詳しく  
知りたい人は  
この本が  
オススメです!



『出口なお 出口王仁三郎の生涯』  
(伊藤栄蔵著・天声社刊・680円税込)

### 二人の教祖

光と影、男と女、動と静、+（プラス）と-（マイナス）、陽と陰というように、物事にはすべて、二方面の働きがあります。

例えば、布を織る場合、経糸と緯糸のそれぞれに役割があります。経糸はびんと張って、一本もゆるんではいけません。緯糸は、経糸の間を右に左に動いて、さまざまな模様を生み出します。

同じように、教えにも経と緯が必要です。

経糸のように、厳然としてゆるぎない教えを示す出口なお開祖。緯糸のように、開祖の教えを軸として、時処位に応じてあらゆる方面に救いの教えを発信する出口王仁三郎聖師。二人の教祖がいて、経と緯の教えがあることは、大本の大きな特色です。



### 大本本部

綾部・梅松苑 綾部祭祀センター  
〒623-0036  
京都府綾部市本宮町1-1 梅松苑 / TEL 0773 (42) 0187

亀岡・天恩郷 亀岡宣教センター  
〒621-8686  
京都府亀岡市天恩郷 / TEL 0771 (22) 5561

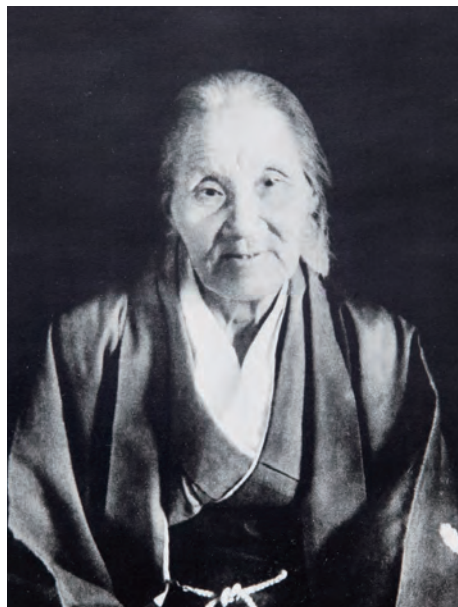
東京本部 東京宣教センター  
〒110-0008  
東京都台東区池之端 2-1-44 / TEL 03 (3821) 3701

大本ホームページ <http://www.oomoto.or.jp/>



<連絡先>





大本開祖・出口なお

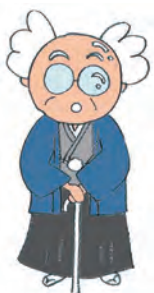
【出口 なお】(1837～1918)  
生涯にわたって神の世の実現と人類の平安を祈り続けた

大本の開祖・出口なおは、江戸末期の天保7(1837)年、現在の京都府福知山市の桐村家に生まれました。幼いころから親に孝行を尽くし、それが認められ、13歳のころには時の藩主から表彰を受けたほどでした。

数え17歳で綾部の出口家の養女となり、その後大工の政五郎と結婚。夫の気ままな生活と晩年の看病にもよく仕え、三男五女の母として、糸引き・紙屑買いで生計を立て、過酷な生活を生き抜きました。

貧困の中にも、清くつましい生活をしていたなおに、数え57歳を迎えた明治25(1892)年の節分の夜、「良の金神」という神がかかり(帰神)、力強い男神の声を発しました。

この時から、神は、なおの口や手を通して神の言葉を世に伝え始めました。これが、「大本」のはじまりです。

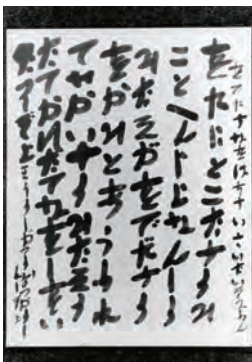


【お筆先】

「筆を持って」という神の言葉に従いなおが筆を持つと、自然に手が動き、文字が記されました。読み書きができないなおが書いた文字は、まさしく神によって書かれたもので、これを「お筆先」といいます。

お筆先は、なおが昇天するまでの27年間書き続けられ、人類の「われよし」、「つよいものがち」をいましめ、このままの世界が続けば、人類は危機に直面することを預言・警告し、人々の改心を厳しく迫りました。

それは生涯で半紙約20万枚におよびました。



【お筆先】

豆知識

清らかな生活

厳しく力強い神の言葉を取り次いだ出口なおですが、普段の生活はつつましく、質素なものでした。

木綿の着物を好んで身につけ、食事は椀に二口か三口ほどのご飯に白湯をかけたものと、おかずの野菜という一汁一菜でした。

なおと接した人々は、この上打ち水をしたような、清らかで気品ある立居ふるまいに心うたれたといえます。

なおは一生をかけ、世の大難を小難に、小難を無難に」と祈り続けました。



聖師・出口王仁三郎

出口王仁三郎聖師は、明治4(1871)年、現在の京都府亀岡市で、貧しい小作農・上田家に生まれました(幼名は喜三郎)。地下水脈を言い当てたり、数え13歳で小学校の代用教員となるなど、並はずれた霊力と智力の持ち主で、「神童」とよばれたといえます。

出口なおの筆先を目にした喜三郎は、綾部になおを訪ね、やがて大本入り。なおの五女・出口すみこ(後の二代教主)と結婚し、出口王仁三郎と名乗りました。王仁三郎は教団を組織化するとともに、国内外でさまざまな活動を展開しました。

王仁三郎は宗教者であり、思想家であり、また霊能者であり、大芸術家でもあるという、大きなスケールの持ち主でした。

豆知識

芸術は宗教の母

出口王仁三郎は、耀盃の制作をはじめ、陶芸、書画など数々の作品を残した芸術家としても知られています。

また、「芸術は宗教の母」と唱え、天地の森羅万象はいずれも神による「大芸術作品」とみて、その真の姿に触れながら、「神とともに楽しみ、神とともに生き、神とともに働くのが真の宗教である」と主張しました。

この精神は、三代教主出口直日の時代に「信仰即芸術即生活」という教風として確立されました。



大本の教典を整備・著述

王仁三郎は、お筆先に漢字を当て、大正6年から『大本神論』として発表しました。

さらに、大正10年からは、高熊山修業で見聞した内容を口述し、『霊界物語』(81巻・83冊)として刊行。そのほか、膨大な教典・教説書を著述しました。



【出口 王仁三郎】(1871～1948)  
「人類愛善」「万教同根」の理念をかかげ、世界の平和と人類の救済に力を尽くした



横になって霊界物語を口述する出口王仁三郎(手前は筆録者)